

## 【ポスターセッション】

## 認知症の人へのケアプランに対する利用者の意向・思いの反映に関する研究

○渡邊 浩文（武蔵野大学・5577）

杉原 陽子（首都大学東京・4670）

キーワード：ケアマネジメント、認知症、ケアプラン

### 1. 研究目的

認知症になっても、できる限り住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けることができるために、本人の意思を尊重したケアマネジメントの実施が重要であると考えます。しかしながら、意思疎通に困難を抱えた本人の意向・思いをケアマネジャーがどのように把握し、援助を展開していくかについては十分な検討が行われているとはいえません。また、実際のケアマネジメントにおいては、本人だけでなく、介護する家族等の支援も視野に入れなければならない。ケアプランの作成においては、介護者にとって本人の意向・思いをケアマネジメントに反映させることが家族にとってどのような意味を持つのかについても検討していかなければなりません。そこで、本研究では、ケアプランに対する家族の満足度に影響を与える要素について、特に本人の意向や思いをケアマネジメントに反映させることに着目しながら検討を行う。併せて、認知症の重症度と本人の意向や思いをケアマネジメントに反映させる実践との関係性について検討し、当該実践のあり方について検討した。

### 2. 研究の視点および方法

都内 A 市における平成 28(2016)年 8 月 31 日時点での要介護認定者のうち、特別養護老人ホーム入居者を除外して、各要介護度から 200 人ずつ無作為抽出した計 1,000 人を調査対象者とした。上記対象者の介護を主に担当している家族・親族（主介護者）に対して、訪問面接調査を実施した。介護を主に担当している家族・親族による回答が難しい場合は、調査対象者本人等に回答してもらった。調査は、平成 28(2016)年 9 月から 11 月に実施した。なお、本調査では、要介護度ごとの傾向を把握するために、人数が少ない要介護度においても一定の有効回収数が得られるよう、各要介護度の実際の人数比率とは異なる標本数を割り当てて調査対象者を抽出した。そのため集計にあたっては、要介護度ごとの回答結果が、実際の母集団（平成 28 年 8 月 31 日時点の認定者）の人数比率に応じて全体の結果に反映されるように、ウェイト値を乗じた標本数で集計した(ウェイトバック集計)。

### 3. 倫理的配慮

調査への協力は強制ではないことを依頼状に明記するとともに、訪問時にも口頭で説明し、同意が得られた場合にのみ調査を実施した。首都大学東京の倫理委員会の審査を受け、承認を得た上で調査を実施した。

#### 4. 研究結果

調査の結果、657票が回収された。家族が回答し、かつ分析に必要な項目を回答していた419票を分析対象とした。回答者の要介護認定者との続柄は、「配偶者」34.9%、「娘」31.1%、「息子」17.5%、「嫁」11.9%、「兄弟・姉妹」2.8%であった。認知症の診断を受けたものは、44.3%であった。本問らが開発した認知機能障害の程度を調べる16項目に基づいて分類した結果、「認知機能障害なし」39.3%、「軽度」22.1%、「中等度」26.0%、「重度」12.2%、「欠損値」0.3%であった。ケアプランに対する家族の満足度（以下、満足度）は、「非常に満足」36.6%、「わりと満足」53.3%であった。本人の意向や思いのケアプランへの反映の程度（以下、意向の反映の程度）については、「かなり反映」38.4%、「多少反映」29.8%、「本人の意向を確認できない」が22.5%であった。ケアマネジャーがケアプランを本人にどの程度説明してくれたか（以下、説明の程度）については、「かなり説明」43.1%、「多少説明」23.2%であった。

意向の反映の程度、説明の程度について認知症重症度とのクロス集計を行った。意向の反映の程度については、各重症度別で、「かなり反映」と回答したものの割合は、「認知機能障害なし」が47.9%、「軽度」が40.4%、「中等度」が32.1%、「重度」が17.3%と認知症の重症度が上がるにつれて割合が低くなる傾向がみられた。一方、「あまり反映されていない」としたものが、「症状なし」で6.5%、「軽度」が10.6%回答していた。説明の程度については、各重症度別で、「かなり説明」と回答したものの割合は、「認知機能障害なし」が58.4%、「軽度」が42.4%、「中等度」が34.9%、「重度」が13.7%と認知症の重症度が上がるにつれて割合が低くなる傾向がみられた。満足度「非常に - 割と満足」「あまり - 全然満足していない」と、意向の反映の程度「かなり反映 - 多少反映」「あまり - 全く反映していない」の関連性について認知症の診断の有無の2群に分けて検討した。本人の意思を「かなり反映 - 多少反映」しているほうが、ケアプランを「非常に - 割と満足」していた状況が、診断なし（ $P=0.000$  Fisher 正確検定による）及び、診断あり（ $P=0.003$  Fisher 正確検定による）の両群で確認された。

#### 5. 考察

ケアプランへの本人の意向や思いを反映することは、診断の有無にかかわらず家族等にとってもケアプランの満足度に影響を与えることが示唆された。一方、ケアプランの本人への説明、ケアプランへの本人の意向、思いを反映させている程度は、認知症の重症度が増すごとに難しくなっていく傾向がみられ、認知症の利用者へのケアプランの説明や、本人の意向・思いをどのように把握し、ケアプランに反映させていくかについての課題が改めて明らかになった。一方、軽度の場合でも、あまり反映されていないケースがある状況が確認され、それらの実態や対応について検討する必要性が示唆された。

謝辞：本研究は JSPS 科研費・基盤研究 B・25285175 の助成を受けたものです。調査協力者及び関係各位に深謝いたします。